

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 20 日現在

機関番号：16102

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2016

課題番号：26420607

研究課題名(和文)近代期麗水地域の民家に関する調査研究 海洋文化圏の影響の視点からみた考察

研究課題名(英文) Research on the Folk House of Yeosu Area in a Modern Age -Consideration from a Viewpoint of the Influence of the Ocean Culture Area-

研究代表者

金 貞均 (KIM, Jeong-Gyun)

鳴門教育大学・大学院学校教育研究科・教授

研究者番号：10301318

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,800,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は近代期の韓国南部地方麗水地域の近代民家について日本の海洋文化圏の影響の側面から究明しようとするもので、麗水地域の内陸・海岸・島嶼地区の民家調査と九州圏の調査によって行われた。調査研究の分析・考察の結果、麗水民家の一般型(南東海岸型)を確認し、麗水民家の時期別傾向と近代民家の成立と特徴(平面構成、平面寸法、屋根形式等)を明らかにした。そして海洋文化圏として麗水と九州圏のつながりを確認し、麗水近代民家の近代的变化要素から海洋文化圏の検証につなげる知見を得ることができた。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this research is to clarify the modern folk house of Yeosu area from the aspect of the influence of the ocean culture area in Japan. This research was carried out by the field survey of Yeosu area and Kyushu area. The results of the study were as follows. 1) It was confirmed that "a southeastern shore type" was a general type of the traditional folk house in Yeosu area. 2) We clarified a tendency of folk house from 1910 to 1960, the establishment and the characteristics (plan constitution, plan dimensions, roof types etc.) of the modern folk house in Yeosu area. 3) The Yeosu area was connected to Kyushu area as the same ocean culture area. 4) We were able to get knowledge which it links to the verification of the ocean culture area from modern change factors of the folk house in Yeosu area.

研究分野：住居学

キーワード：伝統民家 近代民家 麗水民家 平面構成 平面寸法 近代化要素 海洋文化圏

1. 研究開始当初の背景

韓国の近代化は、開港(1876年)以降1945年までの日本植民地期に日本を通して行われた。建築・住宅分野においては洋式・日式住宅、住宅改良運動など外来の住居様式・文化が日本から流入し、日本が表層的住居文化を先導したといえる。韓国で近代住宅に対する論議は1970年代後半以降活発に行われ、多くの研究成果を上げてきた。その多くは近代化を洋式建築の移入と定着の過程と捉えた、都市住宅を中心としたものであり、相対的に変化の進行が遅い農村地域の住宅は疎かにされてきた。近年では住宅の近代化を伝統建築の持続的変化過程の中で究明しようとする視点、在来住居文化の内在的近代化過程として捉えようとする視点が提案され、近代期の地方韓屋を対象とする研究が重視されてきている。一方、韓国の近代住宅をめぐる日本側の研究は近代化による変容の視点から日韓の住居・住様式の比較考察を試みた研究、住宅平面の考察と空間の変化に注目した朝鮮営団住宅研究や日式住宅に関する研究などがある。しかし、まだ時代性や住居の変化発展過程を捉えた研究は少ない。

韓国の近代住宅の成立には、日本植民地期に全国地方都市まで拡散した日式住宅をはじめ日本の影響を多く受けていると思われる。しかし都市住宅を中心に部分的に論じている程度に止まっており、近代住宅の発展過程における日本の影響を真正面から取り上げた研究はない。しかし、住居史的事実に対する客観的かつ厳正な評価なしで、近代建築・住宅の研究が前進することはできない。

本研究はこうした問題意識に基づいて、「日本の近代住宅が韓国の伝統住宅の変容・発展に及ぼした影響に関する研究」の一環として、韓国南部地方、特に麗水地域の近代民家に着目した。1930年、麗水下関間直航路(関麗連絡船)開設を契機に飛躍的に発展した麗水地域に今も現役住居として使われ

ている民家の殆どは近代期に建てられたものである。当地域の近代民家は伝統民家が近代期の社会文化的変革の過程で変化・発展したもので、当時の九州圏との強いつながりから両地域の民家を比較し、麗水圏と九州圏をつなぐ海洋文化圏の視点から日本住宅の影響を解明していきたい。またこれまでの民家研究は伝統民家中心に行われており、特に近代民家の発展過程は不明で、その実態解明が待たれている。

2. 研究の目的

本研究は近代期の韓国南部地方麗水地域の近代民家について日本の海洋文化圏の影響の側面から究明しようとするものである。そのために、①近代期伝統民家の変化・発展様相の解明：伝統民家が近代期の社会文化的変革の過程でどのように変化・発展してきたか、麗水地域の民家を対象に究明し、②麗水地域の近代民家の成立と実態を明らかにする、③麗水民家の海洋的性格を確認：麗水文化のアイデンティティは海洋に根拠を置くといわれており、麗水地域の内陸・海岸・島嶼別民家の共通性を明らかにする、④近代民家の成立における日本の影響について：九州圏の調査を通して麗水近代民家の系譜を再構築するための手がかりをつかみ、麗水圏と九州圏をつなぐ海洋文化圏の検証につながる知見を得ることを目的とする。

3. 研究方法

本研究は日本の近代住宅が韓国の伝統住宅の変容に及ぼした影響を明らかにするために、文献研究による論理の裏付けと現地調査・実測調査による立証というかたちで進める。研究では麗水民家の伝統性の変容に焦点を合わせ、近代化要因を確認した。

調査対象である韓国全羅南道麗水地域の民家調査は、3回に分けて行われた。調査日程と地域は、①平成26年8月10日～14日、

召羅面集落(徳陽・福山地区)、華井面島嶼集落(白也島・蓋島)、②平成27年12月7日～11日、麗水海岸地区集落(ガサ、マサン集落)、③平成28年11月4日～11月8日、島嶼地として巨文島集落(古島・東島・西島)、突山島集落(平沙里、屯田里、金鳳里集落)で、研究対象民家の資料収集及び現地調査を実施した。現地調査では間取り、木架構造や部材率の確認および実測、外観・配置・建築材料の確認、マダン(庭)の構成方式等および写真撮影等を実施し、近代期に建てられた民家の様子を確認した。生活の変化を受容する内的空間要素に着目して、生活上の変化が直接に反映される平面構成、配置形式など、空間構成要素の変化に注目した。

また麗水地域と同じ海洋文化圏域にある九州地域の実態をつかむため、①平成27年2月27日～3月1日、長崎市東山手・南山手地区の近代住宅・鹿島市肥前浜宿伝建地区の民家・佐賀市旧古賀家住宅他文化財指定民家・福岡市旧三浦家住宅・糟屋郡新宮町横大路家住宅等の調査及び関連資料の収集、②平成29年2月20日～23日、韓国麗水間直航路(関麗連絡船)のあった下関市における近代建築物の調査(新地西町の住宅地、唐戸町の近代建築物群)を行った。

4. 研究成果

(1) 近代期麗水地域の伝統民家の変化・発展

まず本研究における韓国の近代期の設定は(開港以降と見るのが一般的であるが)日韓併合の1910年から1945年までとする。その理由は1910年を境に日本からの移住者が増え、日本人のための日式住宅が朝鮮各地に建築され、一般人の目に触れる機会が増えはじめたからである。よって在来住宅への影響は1910年以降と見るのが妥当である。

近代期麗水は水産業の中心都市として、日本人の入植等で飛躍的な発展を遂げた地域で、韓国の南海岸圏域の真中に位置し、現在

も水産・観光産業の中核都市である。麗水地域の伝統住宅は民家を中心に形成・発展してきており、村は民家のみで形成されている所が多い。麗水地域において伝統韓屋の存在は微々たるもので、近代期以前に建築された伝統韓屋はほとんどない。しかし韓屋がないとして、麗水地域の住宅文化が質と量の面で他地域に劣るとはいえない。むしろ民家は長い歴史の中で蓄積されてきた文化的積層が厚く、韓屋に劣らない民家も少なくない。麗水地域の民家は原型を維持しているものが多く、伝統民家が近代期の社会文化的変革の過程で近代民家に変化・発展した。

(2) 麗水民家の時期別傾向分析

調査した時期別民家は、1910年以前(朝鮮末期)6棟、1930年以前(植民地期前半)6棟、1945年以前(植民地期後半で朝鮮総督部の統制が強かった時期)21棟、1960年以前(解放以降)19棟、1960年以降(高度成長期)13棟で、合計65棟である。時期別民家の傾向分析の主な内容は次のとおりである。

①正面間数は3間型8棟、4間型41棟、5間型15棟、6間型が1棟で、1930年以前は4間型より5間型が多いが、これは構造的に丈夫な5間型の家が残っただけと見られ、1930年以降は4間型の家が多くなっている。

②縁の構成は、1930年以降は前面縁型(35%)や前後面縁型(51%)が主で、1930年から1945年の間には前後面縁型が前面縁型より2倍多く見られる。

③室構成では1930年から1945年までは「台所-房(部屋)-房-房」の配列、1945年以降は「台所-房-庁(廳、板の間)-房」の配列が多く見られる。

④時期別平面の平均値では、台所は平均値が下がる傾向を見せ、房1・房2・房3は1910年から1930年代に大きく変化した後は一定値を維持する。側面の全間、前・後面値数は時期とともに下がる傾向を見せている(表1)

表1 時期別平面値数の平均値

単位mm	正面間				側面間			縁間		全文	
	台所	房1	房2	房3	房4	全間	前面	後面	前		後
1910年以前	2652	2570	2377	2326	2330	2804	2657	2647	1171	1263	12427
1930年以前	2694	2436	2284	2440	2248	2745	2581	2445	1151	1130	12193
1945年以前	2595	2492	2372	2411	2395	2758	2367	2381	1175	1233	9985
1960年以前	2625	2506	2416	2460	2427	2658	2225	2212	1121	1214	9660
1960年以降	2522	2495	2383	2423	1955	2642	2163	2359	1155	1397	9752

⑤架構形式は全時期において、「3平柱3梁」「2高柱5梁」が主であるが、1930年から1945年までは「2高柱5梁」が圧倒的に多い(図1、図2)。

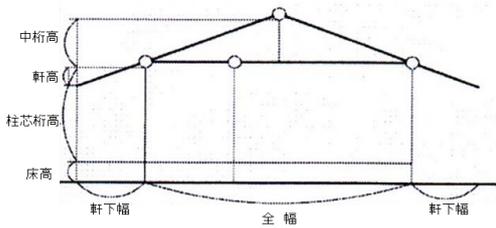


図1 「3平柱3梁」断面図

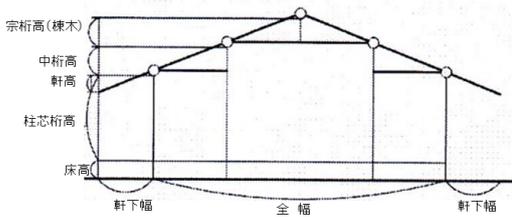


図2 「2高柱5梁」断面図

⑥時期別断面の平均値では、床高はほぼ変化がなく、柱芯桁高・宗桁高(棟木)、軒高は1910年から1930年までが一番低いが、奥行(側面)幅は大きい。全体高は1930年から1945年までの民家の平均値が一番高い(表2)。

表2 時期別断面値数の平均値

単位mm	高さ					奥行幅		
	床高	柱芯桁高	中桁高	宗桁高	全体高	軒高	全幅	軒下幅
1910年以前	516	2038	680	696	3280	294	4608	1014
1930年以前	532	1925	584	667	3547	202	5188	896
1945年以前	507	2019	566	691	3590	277	4830	951
1960年以前	507	1941	593	714	3473	297	4481	980
1960年以降	508	1899	575	697	3430	268	4640	900

(3) 麗水地域の近代民家の成立と特徴

麗水地域に残っている民家の殆どは近代に建てられたものであり、近代民家はその

以前に建てられた伝統民家とは区別される。

近代期に成立した民家はまだ現役住居であることが多く、それは民家の存立価値が継続されていることを意味する。多くの民家はその姿を消していく中で、多数の近代民家が集落(村)を形成し、現代生活を積極的に受容するかたちで改良されながら発展し続けてきたという事実は「民家の現在性」を証明するものといえる。近代民家に関してはまだ十分な研究がされていない中、近代民家たる特徴(一定の形式性)を明らかにした。

分析対象は麗水地域で原形を保っている民家から1910年以前5棟、1930年以前3棟、1960年以前13棟を選定し、平面構成などの分析を行った。

1) 平面構成

①正面間数および室構成

分析結果、麗水民家の一般型「南東海岸型」、即ち「4間/前面縁型」で、「台所-房-庁-房」の平面型が多い(図3)。しかし、1930年以降は麗水地域の一般型ではない「台所-房-房-房(庁なしで部屋が3つ)」の平面も出現し(図4)、3間型と5間型が見られるようになった。3間構成は「台所-房-房」構成が一般的で、「台所-房-庁」構成は少ない(図5)。5間構成は「台所-房-庁-房(2)」 「房-台所-房-庁-房」(図6)の構成であった。

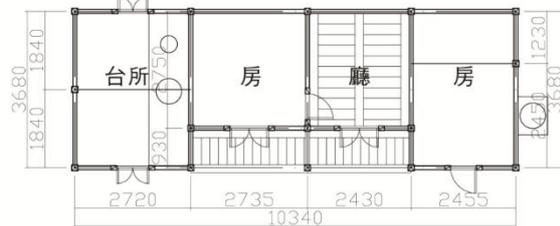


図3 麗水民家一般型(宋氏家屋)

②側面間数および縁

側面間数(母屋の側面幅)は大概1間で、前面縁または前後面縁が設置される。縁は1930年以降1960年以前までは前面縁に後面縁が設置され、前後面縁を構成するようになる(側面に縁の設置は一般的構成ではない)。

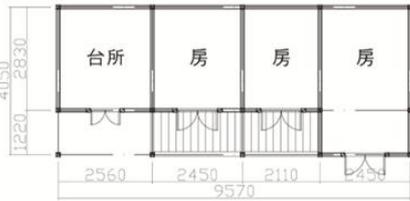


図4 「4間／台所 - 房 - 房 - 房」型 (沙谷里家屋)

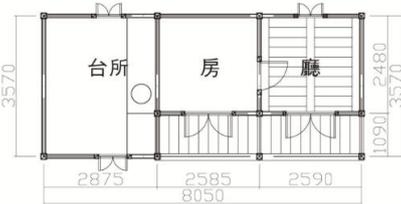


図5 3間型 (朴氏家屋)

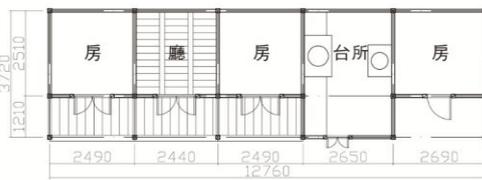


図6 5間型 (徐氏家屋)

よって 1930 年以降に現れた「前後面縁型」は伝統平面型ではない。

2) 平面寸法 (図7、図8)

①正面間寸法

正面間の幅は台所>内房>庁>越房の順に広く、内房と庁、越房の幅の差は少ない。台所は他の室より広く、台所は内房より1尺ほど大きい(平均値)。平均値は概ね台所が9尺で、他は8尺である。台所は後期に狭くなる傾向が見られ、他の空間は時期別差が見られない。

②側面間および縁寸法

側面間の寸法は一定ではなく不規則である。ただ1960年以前の対象民家の平均値が突出しているのは側面間の広い事例が多数含まれているからである。縁は前面縁の幅が増加する傾向を見せ、1960年以降は4尺程度までに伸びていく。

3) 屋根形式と平面寸法

屋根形式は寄棟造が多いが、伝統草家の一般的屋根葺き材である藁葺きから近代的葺き材に変わる過程で入母屋造に変わるケースもあった。屋根葺き材は藁から近代材料の石綿スレートに改良される。瓦の場合もある



図7 麗水民家一般型の立面 (丁氏家屋)

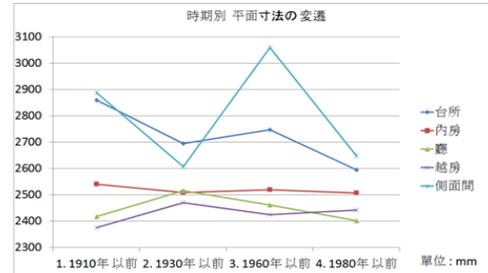


図8 時期別平面寸法の変遷

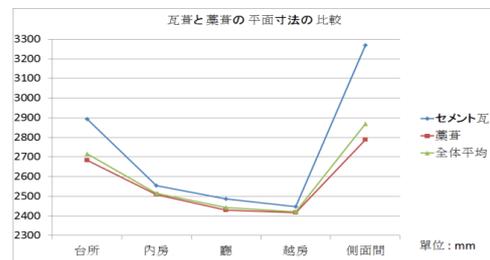


図9 瓦葺と藁葺の平面寸法の比較

が、瓦は伝統瓦ではなく、草家構造に適合した軽量のセメント瓦である。なお、大概のセメント瓦は二軒とセットで造られた。セメント瓦は「セマウル運動」時屋根改良として導入されたものではなく、1960年以前に「セメント瓦と二軒」のセットになっており、計画的に取り入れたものと見られる。なお、瓦屋根は草家屋根より正面と側面間の幅が広い傾向を見せている。これは瓦屋根の建築が規模と格式の面で上であることを示唆する。側面間で極端的に差を見せるのはセメント瓦屋根の4事例中2事例が4000mmに近い間幅を持っているためである(図9)。

4) まとめ

以上の結果、調査民家の平面構成は「4間／前面縁／台所 - 房 - 庁 - 房」型の「南東海岸型」が多いのが確認された一方、「4間／前面縁／台所 - 房 - 房 - 房」型や3間または5間構成等、多様な平面型の存在が確認された。側面間数は1間で、側面縁は一般的に構成しない。縁構成では1930年以降前後面縁構成が見られるようになる。正面間幅は台所が一

番広く（平均値 9 尺程度）、他の空間は大体同じ幅（平均値 8 尺程度）を見せていた。ただ後半になると台所のみ間幅が縮小する傾向を見せる。側面間は不規則で、前面縁は幅が大きくなる傾向を見せ、1960 年以降は 4 尺に至る。

(4) 海洋文化圏として麗水と九州圏のつながり

麗水地域に日本人の常住は 1908 年より増え始め、1909 年に 276 名、1912 年に 862 名、1914 年 1,109 名、1919 年 2,582 名、1942 年 4,262 名まで増加する。日本人移住者の集団居住地がつくられ、代表的移住漁村として「愛知県移住漁村」「広島県移住漁村」が確認された。

麗水港では下関間連絡船により朝鮮の農水産物や日本の商品らなど物資の交易だけではなく、人々が往来し、急激に近代化が進むことになる。九州地方の民家調査の中で、特に麗水間直航路（関麗連絡船）のあった下関の港地区の調査において、きつい斜面の横長狭小地に建つ住宅は昔のかたちを残し、麗水の港地区や島嶼地区と似た集落形成を見せていた。ただ住宅において日本は路地に対する開放性（写真左）、韓国は建物とマダン（庭）が一体化され、塀や垣根で路地と分離する閉鎖性が見られた（海風対策も、写真右）。



下関新地西町の住宅 麗水海岸地区の民家

なお九州地方の調査では近代期の建築物と保存民家の遺構を通して、近代期の西洋化と伝統性の融合を確認することができた。

(5) まとめ

麗水近代民家の調査分析から近代的变化要素をまとめると、①平面形式は一列 4 間型

を基本構成に多様な平面型が確認され、庁（板の間）の房（部屋）化が見られた。ただ平面の二列（複列）化による住空間の室分化、機能分化は見られなかった。②1930 年以降後面縁が設置され、「前後面縁型」が登場した。縁は多様な生活の場であり、生活の多様化とともに縁空間が拡大されたと考える。日本は住宅回りに通路空間として縁側をつけていることが多く、示唆する点がある。③ガラスや改良瓦として軽量のセメント瓦など近代的建築材を導入している、④一部の民家において柱が細く、柱や間幅の規格化が見られた。

本研究では近代期麗水民家の成立と特徴について時期別民家系譜を構築した。特に日本併合時期に建てられた近代民家の特徴を明らかにし、麗水圏と九州圏をつなぐ海洋文化圏の検証につなげる知見を得ることができた。今後、九州圏の近代民家の詳細な調査と比較を通して日本の影響をさらに検証していきたい。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計 1 件）

- ①金 貞均、近代期韓国南部地方の新興韓屋の成立と発展に関する考察、四国住教育研究報告集、査読無、第 13 号、2014. 3、pp. 3-8

〔学会発表〕（計 3 件）

- ①金 貞均、朴 賛、近代期麗水地域の民家に関する研究—平面の構成と寸法を中心とした事例研究—、2016 年度日本建築学会大会学術講演会、2016. 8. 26、福岡大学（福岡県福岡市）
- ②金 貞均、住まいの日韓比較考察—かたちから見た住まいの異文化理解—、日本家庭科教育学会第 58 回大会、2015. 6. 28、鳴門教育大学（徳島県鳴門市）
- ③金 貞均、近代期韓国南部地方の新興韓屋の成立と発展に関する調査研究、第 61 回日本家政学会中国・四国支部研究発表会、2014. 10. 5、広島女学院大学（広島県広島市）

6. 研究組織

(1) 研究代表者

金 貞均 (KIM, Jeong-Gyun)

鳴門教育大学・大学院学校教育研究科・教授

研究者番号：10301318